

---

GCOE NewsLetter

[No.45 2011/6/30]

---

佐藤彰一拠点リーダーのフランス学士院碑文・美文アカデミー

外国人連携会員選出のお知らせ

gCOE講演会の開催について（再掲）

国際研究集会の開催について

次のオープンレクチャーについて

「テキスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約

「テキスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約

第38回オープンレクチャーの要約

gCOEスタッフ海外出張報告

---

- 佐藤彰一拠点リーダーのフランス学士院碑文・美文アカデミー  
外国人連携会員選出のお知らせ
- 

5月27日に本プログラムの拠点リーダーである佐藤彰一特任教授がフランス学士院碑文・美文アカデミー外国人連携会員に選出されました。同アカデミーはフランス学士院を構成する5つのアカデミーの一つで、1663年に創設され、考古学者、美術史家、文献学者、古代史家、中世史家を会員としています。佐藤先生の同アカデミー会員への選出は、イスラーム美術を専攻するハーバード大学名誉教授故オレグ・グラバール氏の席を継承するもので、故秋山光和東京大学名誉教授（日本美術史）および故平山郁夫東京芸術大学学長（日本画）の両名に次いで3人目となりますが、西洋中世を専門領域としているという点で画期的といえます。

- 
- gCOE講演会の開催について
- 

講演者：宮川 繁 教授（MIT）

題目：歴史と画像：Visualizing Cultures

日時：2011年7月7日（木）14:00時～

場所：文学研究科大会議室

(使用言語：日本語)

---

■ 国際研究集会の開催について

---

第12回国際研究集会が以下の日時に開催されます。

「歴史におけるテキスト布置」 Configuration du texte en histoire

日程：2011年9月1日（木）～2日（金）

場所：名古屋大学（野依記念学術交流館）

使用言語：英語・フランス語（同時通訳付）

---

■ 次回のオープンレクチャーについて

---

日時、講演者、題目は、決定次第下記 GCOE の Web ページでお知らせします。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/activity/activity03/>

---

■ 「テキスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約

---

Kazuyoshi Oishi (2011年5月19、26日)

‘The Phenomenology of Textual Multiplicity and Fragmentation and the Hermeneutic Circle in the Case of English Romanticism’

Multiplicity and Fragmentation are curious features of English Romantic texts. There are at least eighteen different versions of Samuel Taylor Coleridge’s ‘The Rime of the Ancient Mariner’, for instance. The first published version appeared in the 1798 *Lyrical Ballads* in a distinctively archaic style, whose form and language were modernised for the second edition in 1800. Another drastic change was made in 1817 when Coleridge added a Latin epigraph and prose marginal glosses to the body text. He kept revising the poem till he died in 1834. This is not the sole example. Coleridge notoriously proliferated his texts by continual rewritings and revisions. ‘The Eolian Harp’ has sixteen or more manuscripts; ‘This Lime-Tree Bower My Prison’, twelve texts; ‘Frost at Midnight’, ‘Kubla Khan’, ‘Christabel’, and the ‘Dejection’ Ode, all

respectively have more than eighteen texts. None of these texts and manuscripts can be regarded as 'final' or 'completed' texts: they are rather fragmentary pieces interspersed in the course of his reworking for unattainable perfection.

Traditionally, the best or most authoritative text of an author's work has been thought to be some form of 'final' version, most often the latest text written or printed during the author's lifetime. In the case of 'The Rime of the Ancient Mariner', the text in one or another of Coleridge's late *Poetical Works*—1828, 1829, or 1834—had long been considered to be *the* best, *the* most authoritative, version. But in the framework of post-modern criticism in the 1970s and 1980s, priority began to be given to all earlier versions, whose incomplete and fragmentary states, whether in manuscripts or in printed forms, came to be viewed as possessing more values and virtues than the final versions. The authority of texts has been further destabilized these days when the consensus is more or less established that every individual version of a work is a distinct text in its own right, with unique aesthetic character and unique authorial intention.

Hermeneutics provides a vital critical ground that illuminates the problems and meanings of all this textual multiplicity. Not just Coleridge, but Wordsworth, Keats, Shelley and Byron were all sensitive to the critical receptions of their works, and were never satisfied with the finished forms of each work. Either to pre-empt malicious reviewers or to vindicate their literary productions, they obsessively reworked on and reshaped their works. As in the case of Wordsworth's *Prelude* or Keats's *Hyperion* poems, it was not rare that they kept revising a single work without any attempt of publication and left it as fragments. The hermeneutic circle, constituted by the dialogical relationship between the author and the reader, thus expanded endlessly along with the continual revisions and publications or receptions of each work. It has been proliferated further, with modern criticisms unsettling the traditional textual authority and new interpretations being (re-)produced on the basis of fragments.

The proliferation of the hermeneutics circles is closely tied up with phenomenology of fragmentation at bottom. As Thomas McFarland argued in the 1980s, incompleteness, fragmentation, and ruin—the diasparactive triad—are at the very centre of the modern culture: the phenomenology of fragmentation is the phenomenology of human awareness. Heidegger's twin conceptions of *Geworfenheit* (the sense of being hurled into reality, broken off) and *Verfallen* (the sense within life of its continuing ruin) are ineradicable criteria of modern existence. His formulation that 'in existence there is a permanent incompleteness (*ständige 'Unganzheit'*), which cannot be evaded' are applicable to most of English Romantic works, as well as to German ones. The Romantic image of a wanderer in vain pursuit of an elusive vision of the ideal beauty, as

we find in Shelley's *Alastor*, demonstrates how continually English Romantics were obsessed with dreams, imagination, and ideal visions, yet failed to attain them and consequently remain acutely conscious of the fragmentation, incompleteness, and ruin of existence. Continual multiplication and fragmentation of the Romantic texts, produced through the ever-expanding hermeneutic interpretative circles, thus register the existential dilemma shared by the Romantics, and disclose their Heideggerian senses of *Geworfenheit* and *Verfallen*.

---

■ 「テキスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約

---

● テキスト布置解釈学各論 IV

フォヴェルグ・クレール（2011年5月19,26日、6月9日）

「フランス啓蒙思想とパラテキスト」

テキストが作者自身の言葉を読者に読ませるものであるとすれば、テキストはパラテキストに対して定義されており、もう一方ではパラテキストがテキストについての付注と注釈として構成されていることになる。このように理解されたパラテキストは、何よりもまずテキストの欄外への参照または書物のページ下への参照の役割を果たす。その欄外またはページ下において本文のテキストに対する補足や、解説・解釈をつける脚注や注解がある。

パラテキストは書物の構成の上でも挿入されている。その場合、パラテキストというのは題目や予告や序文などの要素をも示すようになる。特に作者の編である書物の本体に対して、パラテキストの要素は付属物として理解される。それでも、啓蒙思想の時代において、啓発的でなくても、少なくとも学識豊かな読者向けの書物にパラテキストを関係づけることになると、パラテキスト自体は不可欠な要素といえる。というのも、作者の権威は著作に基づいて評価され、更に著作はパラテキストを基に批評するのが通例になるためである。『百科全書』の項目「書物」（文学）は、パラテキストを読むだけで著作の批評ができる方法を示しており、その点で大変参考になる。パラテキストは、読者が書物の理解を得て、書物の有用性を認識できるように、書物の構成と執筆状況、それに出版と受容の歴史を示す上で必要である。

しかしながら、パラテキストには極めて重要な参照の機能があることで、テキストも書物も超えていると思われる。確かにパラテキストを構成する参照の機能は、ディドロ・ダランベール著『百科全書』に見られるように書物の内部

にあるが、参照という行為は書物の外部まで、つまり同一のジャンルにおいても機能する。その結果、パラテキスト自体は必ずしもテキストでなくても、或る布置の中の本文のテキストの位置を示すことによって、テキストに固有の不足を補うのである。

---

## ■ 第 38 回オープンレクチャーの要約

---

2011 年 6 月 22 日 (水) 18:00～ 名古屋国際センタービル 15 階 グローバル COE オフィスにて

講演者： 重見 晋也 准教授 (名古屋大学大学院文学研究科・電子テキスト学)

題目： ミシェル・フーコー『知の考古学』における布置概念

ミシェル・フーコーは『言葉と物』(1966)の中で、フランスにおける認識論的伝統に立ちつつ、17世紀初頭に生じた認識論的断絶を、言語学、経済学、博物学を対象とする学説史研究から明らかにした上で、ある文化に属するあらゆる学問が依拠せざるを得ない静的な参照枠をエピステマーということばで表現する。そしてこのエピステマーという概念は、多様な形象によって構成される全体であるというその在り方に焦点が当てられる場合に、布置 **configuration** とも形容される。『言葉と物』は、商業的にも学問的にも多くの成功をフーコーにもたらす一方で、多くの批判の矢面に立たせることとなった。そこから考古学という方法論に対する反省的考察が『知の考古学』(1969)に結実することとなる。

考古学に対する方法論的反省の中で、エピステマーは用語として使われ続けるものの、その内実は大きく変更される。それはもはやある文化に帰属する静的全体ではなく、4つのレベルにおいて発動する規則性(フォーメーション・ルール)に基づいて複数の言説的実践から形作られる「言説 **discours**」であり、そうした言説の総体としての「知 **savoir**」であり、言説に関わるシステムとしての「集蔵体 **archive**」であるとされる。そしてその言説的実践システムは、実定性から認識論へ科学性から形式性へと時間とともに段階的に変化する全体として、すなわち動的システムとして再定義される。

静的システムとしてのエピステマーへのダイナミズムの付与は、歴史性の欠如した歴史の試みという、『言葉と物』の刊行後になされた理論的批判に応えるものだったといえる。しかし当初エピステマーとして提示した概念に、『知の考古学』において大幅な修正を施してなお、布置という性質は堅持されている点は重要であろう。布置という静的な全体を動的全体として再定義すること、

静態と動態のこの共存こそが、フーコーの関心の在処を示すと同時に、テキスト布置解釈学の射程を示しているといえるのではないか。

---

■ gCOE スタッフ海外出張報告

---

森際 康友 (gCOE 事業推進担当者・法哲学、法曹倫理)  
「法テキスト国際会議に関する企画打ち合わせ」

2011年3月14日、余震が続く成田空港を離れ、会議開催地候補の下見を兼ねてイングランド、スコットランドおよびイタリアを巡った。ロンドンでは Adrian Zuckerman 教授と Nicos Stavropoulos ユニバーシティ・レクチャラー (オクスフォード大学)、エジンバラでは Claudio Michelon シニア・レクチャラー (エジンバラ大学)、そしてローマおよびパレルモでは Georgio Pino 准教授と Aldo Schiavello 教授 (パレルモ大学) と共に法テキスト国際会議について企画打ち合わせを行った。

打ち合わせでは、法テキストの解釈をめぐる近年の理論的發展を確認し、さらに進展させるために必要なテーマや方法について協議した。また、オクスフォード、エジンバラ、イタリアでの国際会議開催の可能性について検討し、共同企画者を引き受けてくれた。Stavropoulos 氏とは、解釈的アプローチを取る彼自身および実証主義的アプローチをとる USC の Andrei Marmor 氏を軸に人選を進めることを決定した。開催時期及び他の参加者については、関係者と協議のうえ別途検討することとなった。法テキスト解釈について最新の成果を織り込みながら、新たな地平を拓く体制が構築でき、本学をグローバルな研究教育拠点とするための用意ができた。(2011年3月14~19日、23~25日)

次回のメール版 NewsLetter の発行は 2011 年 7 月下旬 を予定しています。

.....  
GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

---

NewsLetter No.45

発行：GCOE編集部

編集担当：平野克典

Copyright(C) 2011 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

• .....

---

..... •